

重松裕巳編

桜井基佐句集

古典文庫

重松裕巳編

桜井基佐句集

古典文庫

古典文庫第五八六冊

平成七年九月二十日印刷発行

非売品

集句佐基井桜

編者 重松裕巳

発行者 吉田幸一

印刷者 共立印刷株式会社

製本者 (有)武蔵製本

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話〇三(三三九一〇)二七二七
振替口座〇〇一九〇一九一四五九七番

目次

凡例	三
一、富山県立図書館蔵志田文庫本	七
二、書陵部蔵斑山文庫本	一〇一
三、天理大学附属図書館蔵綿屋文庫本	二二七
四、書陵部蔵伝自筆本	二七九
解説	二九五
初句索引	三四一

凡例

一、本文庫には「桜井基佐（永仙）句集」の現存伝本の中、性格を異にする次の四本を収めた。

富山県立図書館蔵志田文庫本

「永仙付句発句集」

宮内庁書陵部蔵斑山文庫本

「基佐集」

天理大学附属図書館蔵綿屋文庫本

「桜井基佐集」

宮内庁書陵部蔵伝自筆本

「基佐集」

一、右の伝本の中「書陵部蔵斑山文庫本」は「続群書類従第三十六輯」に翻刻のものである。

一、翻刻にあたっては、漢字仮名の別、仮名遣い、片仮名等すべて底本のままとしたが、漢字の字体は現行の字体に改めた。

一、底本の明らかな誤字脱字と認められるところもそのまま翻刻したが、底本の欠落箇所は□で示し、時に「ママ」と傍書した場合がある。又、虫損の

ため判読できない字は^{虫損}□とした。

一、書陵部蔵斑山文庫本の「付句部」には、大阪天満宮文庫本（略称「満」）と山田孝雄蔵本（略称「山」）との校異を施した。「発句部」は句の出入りが多いため、本文の校異は避けて〈へ解説〉の一覧表に各伝本の所有句の異同を示した。校異では、漢字仮名の別や仮名遣いなどの相違は略した。

一、巻末に載せた初句索引の検索の便を考慮して、各句に伝本単位の通し番号を付した。

本書刊行の動機は、山田忠雄先生に御所蔵本の御教示を賜ったことによる。その上、先生には本書の御高閲までお引き受け頂いた。記して深謝の意を表します。又、本文庫に収めた底本の各所蔵者並びに大阪天満宮文庫に厚く御礼申し上げます。

一、富山県立図書館蔵志田文庫本

櫻井入道永仙付句

春 部

- 一 けふりにかゝる雲そハれ行
- 二 春のくるあつま野よりも日ハ出て
- 三 きのふの雲を又そなかむる
- 四 春といへは霞たにせぬ朝ほらけ
- 五 しくれぬ月も影そ身にしむ
- 六 明ほのや春ハかすミのたつ田山

七 先梅か香に春や立らん

八 山はまたさやかにミゆる朝霞

九 春又^{また}さえてむめか香も□し

一〇 かすますは何を難

二 里のかきねに薄

三 朝霞けふりを風の吹ませて

三 柳をみれハ雨しつかなり

四 鷺の飛河辺を水のすゑとけて

五 宿ちかく鶯の鳴あさほらけ

六 すそ野そかすむミねのしら雲

七 ちりぬる花の積る木の本

一八 落葉焼松一むらのかすむ日に

一九 月にこそとは、哀もしるへきに

二〇 明ほのかすむさらしなの山

二一 さひしさや夕の色と成ぬらん

二二 かすむ海辺にあまのすて船

二三 さくらのもと、春風そ吹

二四 深る夜の月に霞ハ晴やらて

二五 舟路のすゑハなくさめもあり

二六 あさゆふに霞かハれる山をミテ

二七 いつくのうらそあし火たく方

二八 かすむ夜ハ難波の鐘も声たえて

二九 心なくてハゆかむ物かは

三〇 よしかすめ塩干の奥の海士小舟

三一 枕にちかくかへるかりかね

三二 月かけの暁かすむ船にねて

三三 あたら桜そ埋木となる

三四 雪もまたよし野の奥ハ消やらて

三五 花のあらしそ面かけにふく

三六 はるかなるこしの白ねもかすむらん

三七 春雨のふもとたえく明初て
※「三芳野の花のさかりを見渡せハ
こしの白根に春風そ吹」と書きこみ。

三八 おくはかすみのたかき山さと

三九 古にしさとハあらぬさまなる

四〇 又やミむしかの海への朝かすみ

四一 あたなる春をなとしたふらん

四二 よこの海かすみにくたる天津人

四三 みえしもハてはうらみとやなる

四四 雪まより垣ねの真蔦ママもえ出て

四五 おもひなしにや中ハ難面

四六 きえゆけハく歟おなし山路の春の雪

四七 あはれかすみも世ゝのふる跡

四八 山も今朝きえてや雪のミなせ河

四九 朝ほらけ野への行てに雨晴て

五〇 一もとやなきいろそ木ふかき

五 花のミの別ならすよ都人

五 手折柳におしきあさ露

五 なみもいさをうかつ川そひ

五 船つなくねしろの柳吹風に

五 送しをかへりみつゝも過る野に

五 かすみのいつこ梅か香そする

五 よる行人のたとる山道

五 誰か里の梢ともなき梅か香に

五 よしくもるとも春の夜の月

六 深るまで枕さためぬ梅か香に

六 常ならぬ風とたに聞草の原

三 しつ屋はかなく梅にほふかけ

三 春のをくらすさくらやハある

四 おくハ猶去年の雪ふむ吉の山

五 鷺のミの毛も雪そ残れる

六 あらを田のくろの春草生ひそひて

七 しるへなき野の風の梅か香

六 誰袖そくちてとしく春の草

九 おしむとてやハ春ハとまらし

七 鴈かへるそなたに秋の風もふけ

七 薄かすみ入日の前に色そひて

三 たれか絵しまそ帰るかり金

七三 春風までの去年の寒けさ

七四 月にかり帰る心やわするらん

七五 たちいて、よりおもふ古郷

七六 みよし野の花や此比朝霞

七七 よしいく程そかゝる柴の戸

七八 春さむきおく山桜いつさかん

七九 よハひの後の春の哀さ

八〇 山さくらおもひやるたにくるしくて

八一 なにのまことか世には残りし

八二 よしさらハ花ともまかへ嶺の雲

八三 うつるもハかな春の夜の空